

ながのすいじんじゃ ごれいしゃ
長野水神社(五霊社)

住所：〒839-1301 福岡県うきは市吉井町桜井208-1



7 水神社の鳥居
 この地は桜井といい、かつて桜の名所として知られ、今また桜が植樹されています。



8 手水鉢
 手水鉢は、五角形でそれぞれの面に五庄屋の家紋が彫られています。それを支える石には五庄屋が長野水門を作った時の天井石との説明があります。



9 長野水神社(五霊社)
 明治15年(1882)に浮羽郡長中島武州は彌都波能賣神(みづはのめのかみ)を祀り、水道の守護神として五人の庄屋の御霊を配祀する長野水神社を創建しました。



9 倉富勇三郎(1853-1948)
 神社神殿内に飾られる郷土の偉人。浮羽郡船越村に生まれる。法制局長官、貴族院勅選議員、枢密院議長。法典調査会刑法起草委員などを歴任。



1 竣工碑
 国営筑後川中流域農業水利事業竣工碑



2 長野水神社の社号標
 「五庄屋を祀る長野水神社」と記してある。裏は「長野水神社の由来」を宮司・熊抱孝彦(平成15年当時)氏が選書。



3 神橋
 350年祭記念事業に伴い欄干が赤く塗装されました。



4 稲富稜人(1902-1989)像
 長野水神の境内にある銅像。地元選出の衆議院議員で、昭和28年の大水害復旧に際して多大なる貢献をされました。



5 記念碑
 左から長野水神社創立350年記念碑、大正10年洪水記念燈、昭和28年6月26日水害記念碑



6 水神社の説明

うきは五庄屋散歩

変わる長野水神社周辺の風景

江戸時代初期・寛文4(1664)年に筑後川からの導水を命懸けで実現した五人の庄屋。この五庄屋を祀る長野水神社の周辺は、治水・利水の工事が進み、その風景を変えてきました。



1 長野堰があった当時(寛文4年～昭和28年)

寛文4(1664)年に大石堰が完成。その後、水路の拡幅、延長工事が進み、この地には長野堰が設けられました。さらに水は長野堰で隈上川と平面交差し、下流の角間天秤へと流れていました。

2 長野伏せ越し(逆サイフォン)の設置(昭和34年～)

長野堰は昭和28(1953)年の水害時に破損したため、昭和34(1959)年に隈上川の下を横断する長野伏せ越しが施工されました。

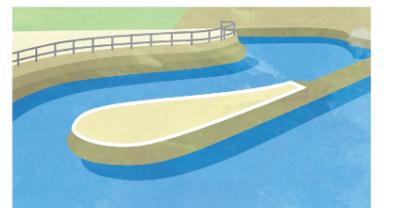


3 新長野伏せ越し(逆サイフォン)、象の鼻と新長野橋

長野伏せ越しは隈上川の河川改修で行われる引堤工事に伴い、令和4(2022)年に改築されました。新たな長野伏せ越しは長さが191.6mで、直径2.4mの鉄筋コンクリート製導水管2本が地下に通っています。長野橋は河川改修に伴って、車道部が隈上川下流部に移設・改築されます。この新長野橋は117mとなり、周辺の歴史や景観に配慮した色やデザインが採用されることになっています。



象の鼻



大石堰から流れてきた水を大きく迂回させるのが「象の鼻」です。これによって流れがゆるやかとなり、土砂が沈殿し、水だけをサイフォンに流す仕組みとなっています。成富兵庫茂安の数ある水利事業の一つとされる佐賀県・嘉瀬川の「象の鼻」を参考に令和5(2023)年に完成しました。

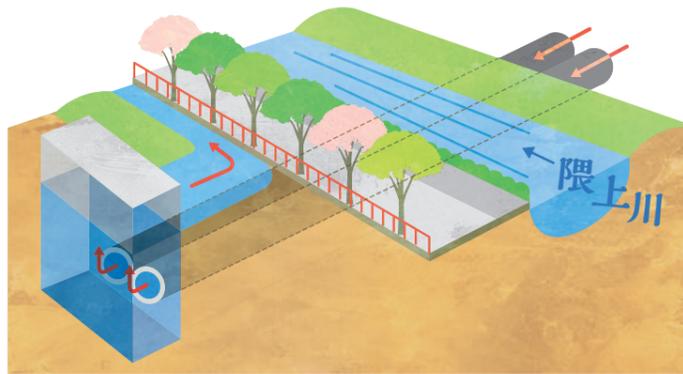
五庄屋の偉業



江戸初期の浮羽地方は、筑後川の沿岸にありながら土地が高く水利が極めて不便なところで、水利用に不便な土地でした。栗林次兵衛・本松平右衛門・山下助左衛門・重富平左衛門・猪山作之丞の五人の庄屋は、筑後川の水を引き入れ送水して下流域を水田化しようと決心。寛文3(1663)年にこの計画を久留米藩に提出しました。大石村長瀬の入り江に取水口を設置し、用水路を造成して導水する

という計画は、導水による洪水を心配した村からの反発もありましたが、藩の許可を得て工事を開始。第一期、第二期、第三期と拡張工事を進め、延宝2(1674)年に難工事の末、大石堰が完成しました。

5人の庄屋をはじめとする当時の農民の努力が後世に受け継がれ、今も約2,000haに及ぶ水田地帯を潤しています。



長野伏せ越し

伏せ越しとは、用排水路等が河川と交差する場合に、河川を横過して河床下に埋設される水路構造物のことです。現在の長野伏せ越しは令和4(2022)年に、191.6mの鉄筋コンクリート管が2本使われたものに改築されました。

大石堰

大石堰は、五人の庄屋の発願により、江戸時代に筑後川を横断する形で設置されました。これによって筑後川の水の一部は大石・長野水道を通して下流部へと流れていきます。



角間天秤(かくまてんびん)

流れてきた水は、この地点で大きく北本線と南本線の二つに分かれます。北本線の取水口に置かれた3つの石はそれぞれ大きさが異なり、その配置によりきわめてバランスのとれた水量調整を実現しています。



井延川サイフォン

取水した水は途中の井延川を越えなければならず、築造時は堰を設置し上昇した川面に用水を合流させ対岸の水路へ流していました。増水時に洪水の危険があるため、平成5(1993)年に水路を井延川の川底に埋設し、サイフォンの原理で横断させる仕組みに改良されました。



白壁通り

吉井まで用水が引き込まれたことで、江戸時代末期から酒、麵、油、榎蠟(ハゼロウ)等の産業が集積し、金融活動(吉井銀)が活発になることで、商家・地主が誕生しました。明治2年の大火を契機に蔵造りが始まり、大正時代には「居蔵屋」が立ち並ぶようになり、現在でもその姿をみることができます。



長野水神社(五霊社)

五人の庄屋の偉業をたたえて祀ったのが長野水神社(五霊社)です。4月8日の春の大祭では、小学生による「浦安の舞」が奉納され、露店も出店し、現在も五庄屋の恩恵を受けている多くの人々が参拝に訪れます。



長野橋

明治7年(1874)頃、原清子氏が自費で架橋しました。工費は巨額であり、往来の人はこの橋を「永救橋」と称し、この行為を称えました。この橋は昭和28(1953)年の水害で惜しくも流出しましたが、その想いはここに残っています。その後コンクリート橋となり、さらに河川改修に伴い改築されます。

大石水神社

大石水神社は大石水道の完成に際して、主唱五庄屋が自然石を建てて、堰や水路の守り神としたものとされています。境内入ってすぐ右には大石、長野、袋野の三堰の偉業を称えた三堰の碑が建っています。

